



○年五月「小浜島の結願祭」など、テーマは多岐にわたっている。今回は、八重山の神行事のなかでも「秘祭」とされる「アカマター行事」について、

第二一八回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇一一年一月二十三日、県立芸大付属研究所内で開かれ、宮良安彦氏が「八重山の赤マター神行事―先人の研究業績によるまとめ」と題して発表した。宮良氏は一九三六年新川生まれ。一九七五年に法政大学大学院を修了後、八重山高校・沖縄商学高校などで長く教職にあり、定年退職後は珊瑚社スコールでも教鞭をとった。ちなみに八重山高校時代は歴史クラブの顧問をしていたという。氏は教育に携わることから、言語や民俗、文化、歴史など多方面から多くの研究成果を発表している。本会でも何度も発表しており、二〇〇五年九月「石垣島の雨乞い行事」、二〇〇六年五月「沖縄の火の神信仰」、二〇一〇

沖縄・八重山文化研究会会報

第 219 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
 事務局 沖縄県立芸術大学付属
 研究所 波照間永吉研究室
 那覇市首里金城町三一六
 〒〇九八―八八―二一五〇四三

喜舎場永珣や宮良高弘、宮良賢貞、柳田国男、植松明石、住谷一彦、ヨーゼフ・クラインナーなどの研究や調査から関連する事項をまとめて報告した。報告は二回にわたって行われる予定で、今回はその前半。はじめに、八重山の豊年祭には、アカマター系のもので、そうでないものとの二種があるとし、アカマター神の伝播として、この神行事は西表島古見村、小浜島、新城島（下地・上地）、石垣島宮良村で行われている行事であるが、ベトナムから古見に伝わったという伝承があり、古見からさらに小浜、新城（上地）、西表（野原）、小浜から宮良、新城（下地）へ伝わったとした（現在、下地では行われていない）。次にアカマター神の系譜として親子神・男女神と島々により違いがあることにふれ、それぞれの村のなかで歴史的に変容してきたとし、アカマター神行事の由来として、ベトナムからの移入伝説や流離単タイプの伝説などを概観した。なお、後半の発表は三月二十日に行われる予定である。

八重山の赤マター神行事

― 先人の研究業績によるまとめ

宮良 安彦

はじめに（概説）

八重山の豊年祭（収穫祭）には 1、赤マター系のもと、2、非アカマター系もの二種類の豊年祭がある。

○豊年祭

●赤マター系の豊年祭

この神行事は一五〇〇年以前に東南アジアのヴェトナムの稲作の神を八重山に移入したものである。

イネ、アワとは特定しない豊作祈願以外に成人式などの人生儀礼が加味された行事となっている。

西表島・古見（こみ）村の赤マター神行事のばあいは、世界的に行なわれている人生儀礼の、生と死の再生儀礼も加味されている（注①②）。

注①この人生儀礼としての再生の儀礼は八重山の年中行事にも組み入れられ、*si:linupapasl*（節祭の話）として、民話の題材ともなっている。

注②イエス・キリストが死んで、三日目に復活したことを祝う復活祭（イースター）もヨーロッパにおける生と

死の再生という思想の表れだと考えられる。ロシアの作家・トルストイの長編小説『復活』はその文学的思想表現である。

古見村で登場する白マター神（元来は子神）はその象徴的存在である。

このように、この神行事は 1、豊作祈願 2、成人式 3、生と死の再生 という複合的な要素をもっている。

この神行事は西表島が、かつては、八重山の行政の中心地であった時代からの神行事である。

この系統の行事は2（非赤マター系）のものより古い形式のものだと思われる。

●非赤マター系の豊年祭

この神行事は一五〇〇年以後におなじく上記の国からイネを持って石垣島に来島した二人の兄妹にちなんで行なわれる神行事である。

平得村の八重山の初代の大阿母（おおおも）職の多国ブナルは安南ホーラザーとも呼ばれ、彼女は首里王府からの帰途暴風にあい、安南に到着し、同国から五穀の種子をもらいうけて来たという伝承がある。

なお、この神行事は石垣島・大浜村に五穀の種物を積んだ漂着船が到来したことにちなんで行なわれる神行事だという説もある。

この神行事は八重山の首里文化圏以前および首里文化圏に組み入れられて（注①）、さらに発展した豊年祭の本格的な神行事になり、八重山の豊年祭を代表するものになった。

注①オヤケ・アカハチの乱があり、石垣島・平得村の大阿母御巖に神として、まつられている多田ブナリなどが八重山と首里王府とを歴史的にむすびつける元になった。この系統のものは台湾島の先住民のアワ作文化を背景にしている（注*①）。

注*①六部族より成立する台湾の高山族（高砂族）は中国からこの島に移動して来たといわれている。彼らはインドネシア語系とオセアニア語系の言語をもっており、周辺の国の中からは数少ないアワ作文化である。八重山のこの型の豊年祭の歌の中にはイネの豊作に見え隠れして、アワの豊作が歌われている。そして、首里王府の農業政策であるイネ作中心となっていく。

このように、本土とは異なり、八重山のアワ、イネの移入は民俗学者・柳田国男の説く、南から北への第1期の文化の遡及の法則に合致している。

この系統のものは1（赤マター系）のものより、新しい形式のものである。

文化短信

新種のヤドリムシ発見

西表島に生息するシヨキタテナガエビから、このほど新種の淡水産エビヤドリムシが発見され、「シヨキタテナガノエラヤドリ」と命名された。

このエビは西表島の河川に生息する固有種。エビヤドリムシは同エビの鰓腔に多く寄生する。淡水産エビヤドリムシとしては日本で初めて確認された。

同ヤドリムシは、元琉球大学教授の諸喜田茂充氏（財）沖縄科学技術振興センター理事長）が一九七三年にシヨキタテナガエビを発見した際に存在を確認。このほど新種と確認されたことから昨年十二月に（株）水土舎主任研究員の齋藤暢宏氏と琉大亜熱帯島嶼科学超域研究推進機構特命助教の成瀬貫氏を含めた三人で学名を付けた。なお同エビと同ヤドリムシは生息地で共存共栄しているが、エビにまったく害を及ぼさない無害の存在かどうかはまだ判断できておらず、今後の研究課題となっている。また、ミナミテナガエビへの寄生も一例確認されており、今後、同エビの寄生特殊性の詳細な調査が必要となっている。

黒島で旧正月恒例の大綱引行事

旧正月にあたる二月三日、竹富町黒島の東筋支会と仲本支会の両集落で、旧正月恒例の綱引きが行われた。国内で最も綱引き行事が多いとされる沖縄で、黒島は唯一、旧正月に行うことで有名。

このうち、東筋集落の旧正月行事は黒島伝統芸能館前広場で行われ、ドラや太鼓が打ち鳴らされるなか、住民らが「正月ゆんた」を歌いながら、無病息災を祈った。また婦人らの巻き踊りや勇壮なツナノミンのあと、南北に分かれて、参加者全員で大綱を力いっぱい引き合い、北が勝利。最後は北からミルクが登場。集落の長老へ五穀の種子を授け、今年の五穀豊穡を約束した。

琉球大が離島支援講座

琉球大学が離島支援プロジェクトとして二〇〇九年度からスタートさせた特別公開講座「知のふるさと納税」が、このほど石垣中学校と石垣公民館で開催された。石垣公民館では石垣市教育委員会の社会教育学級「いしやなぎら学講座」も兼ねた。今回は、石垣市出身で県の理科教育の発展に貢献してきた山口喜七郎氏（元琉大教

育学部教授）と、情報工学の分野で世界的に活躍する高良富夫氏（同大工学部教授）を派遣し、それぞれ「環境問題のとらえ方」と取り組み方」「話しことばの実験室」をテーマに講義した。

世界最大の旅行ガイドブックで八重山諸島がベスト三

世界最大の旅行ガイドブック専門出版社、ロンリープラネット社（本社・オーストラリア・メルボルン）が二〇一〇年一月に発行した「ベスト・イン・トラベル二〇一一」で、「ベスト・シークレット・アイランズ」（知られざる島々ベスト三）部門の第三位に、八重山諸島が選出されていることが分かった。同社は英語による旅行ガイドブックとして世界一のシェアを誇り、客観性・信頼性の高いガイドブックとして知られることから、外国人旅行者の誘致に弾みがつきそうだ。

八重山諸島は、ミシュラン（フランス）が二〇〇九年に欧州で発行した日本の旅行ガイド「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」で川平湾が最高の「三つ星」、石垣島が「二つ星」に格付けされたのに続き世界最大のガイドブックでも評価されたことになる。

新刊紹介

島村修著『八重山の自然を守る』
保護活動の集大成

島村修氏といえ、八重山の自然保護運動でこの人を置いては語れないほどよく知られている。「八重山野鳥の会」や「魚垣の会」「白水の自然を考える会」、最近では「アンパルの自然を守る会」などの会長を務め、新石垣空港建設でサンゴの保護を訴え、白水のダム建設では貴重な生態系が失われることに警鐘を鳴らして中止（一九九七年）させ、アンパルの自然保護ではラムサール条約による湿地に登録（二〇〇五年）させた。こうした活動と功績が認められ、二〇一〇年には「八重山毎日文化賞」を受賞している。

本書はこうした著者の長年にわたる自然保護運動の中で、折々に書かれた文章をそれぞれの運動ごとにまとめたものである。すなわち第一部「島の自然を守る」では新石垣空港、白水、アンパル、宇宙船地球号などの項目に、第二部の「八重山の自然と私」では、野鳥と私、星空と私、ヤシガニと波照間の食文化、波照間島のウニ、第三部「島の調査報告など」ではマンゲ山調

査報告、安良地区の野鳥の調査報告、八重山の化石林などを収録している。

一読して感じるのは、この人の自然保護の発想が、生活感覚に根ざしていることである。為にする自然保護運動ではなく、生活と不離一体であることだ。人間の生活を抜きにした自然保護というのが、どれほどの意味を持つのかどうか知らないが、この人は等身大の発想である。それだからこそ、その主張に説得力があり、共感もするのである。

元々は小学校の理科の先生である。身近な野鳥の観察や、星空の観察といったことを子供たちと共にすることから始めている。だから分かりやすい。本格的な自然保護活動は、一九八七（昭和六二）年の定年退職後であるが、それも学校現場での野鳥や星空などの観測会のいわば延長線上にある。それともうひとつ、八重山の生活文化を「サンゴ礁文化」としてとらえていることである。隆起サンゴ礁の台地の上に生活営んできた八重山の先人たちは、衣食住全般にわたり、サンゴ礁抜きでは考えられない。その発想は、多分に生まれ島の波照間島から来ていると思われるが、「サンゴ礁文化」の考えがこの人の自然保護運動の基底にはある。その「文化の母たる自然」が破壊されつつあることに危機感を抱き、自然保護運動を始めたというわけである。

著者は一九二六（大正一五）年生まれ、二〇〇九年に八五年の足跡をまとめた『点綴』を刊行しているが、これは主に教職にあつた頃に書かれたものや家族に関するものが中心にまとめられ、自然保護運動に関するものは省かれている。したがって自然保護運動に関する文章は本書に収録してある。本書の最後の「八重山の自然の現状と課題」と題する一文は、「あとがき」に相当するものであるが、その中で八重山では話、三味線、踊りなど、郷土芸能は百花繚乱、隆盛ぶりなのに対し、自然や自然保護に対しては無関心層が多く、あるいは関心はあっても実践活動に結び付かない実情を指摘、その原因について次のような見解を示している。「それにはいろいろ原因があると考えられるが、その一つとして今言えることは、長い間の社会資本の整備の遅れによる開発待望論がいまだに幅を利かせていること。その二つめに、八重山の人々が豊かな大自然の中にどっぷりと漬かり、公害や自然破壊による直接の被害を被ることが無く、自然の素晴らしさ、自然のありがたさなどに切実感が無い。その三つに、自然の仕組み（生態系）に対する認識の甘さがあるものと思う」。長年、自然保護活動に関わってきた著者の言葉として、心しておきたいものである。

（南山舎、B六判、三一〇頁、一九〇〇円十税）